

猿 新 聞

編集・発行者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

ナラ枯れ 里山が変だ！

山の変化に気がついたのは、6月末頃。

初夏だというのに、山の所々で木々がまるで紅葉したように色づいているではありませんか。その時は「何か変ヤナ」くらいで、とりわけ気にもとめていなかったのですが、日が経つに従い、その紅葉が点から面へと広がって来るのをみて、これはただ事では無いと、山の異変を感じました。

ナラ枯れです。先例に、大きな社会問題となったマツ枯れがありますが、これはマツ材線虫病によるマツの集団枯死です。加害虫こそ異なりますが、マツ枯れ以上の問題です。文献で確認できる最古の被害は、1930年代の宮崎、鹿児島両県の被害です。ナラ枯れは、ブナ科の広葉樹で発生する樹木の伝染病です。比較的高齢で大径の樹木に発生が多く、発生はその年の気温や降水量によって変化。高温小雨の年には被害量も多く、逆に低温多雨の年には被害量も少ない傾向があるといわれています。

三重県では1999年に熊野市などで、2007年には桑名市でナラ枯れが確認され、南方側と北方側から県中央部に向かって被害が広がっています。森林が存在する、すべての市町村で被害が確認されています。全国に蔓延しつつあるナラ枯れですが、実は三重県は特殊な状況になっているそうです。それは、カシノナガキクイムシ（以下・カシナガ）による被害は今までは同じカシナガによるものだと考えられてきましたが、数年前にカシナガには2系統ある事がわかってきて、これらは通称日本海型と太平洋型と呼ばれています。三重県は、この2種類の被害を同時に受け

ているという、全国でも珍しい被害形態となっています。

ナラ枯れ発生の究明には、地球温暖化が原因だとか、「ならたけ病」だとか報告されたこともありましたが、原因究明には10年の歳月がかかって、2004年ようやくカシナガが法定害虫に指定され、駆除に補助金が利用できるようになりました。

ナラ枯れは、カビの仲間の一種、通称「ナラ菌」が、カシナガによって木から木へ運ばれます。カシナガが樹幹に孔を掘る際に、ナラ菌が木の内部に侵入し、ナラ菌の作用によって樹液流が停止し、枯死に至る樹木の伝染病です。

里山での中心的な樹種であるナラ類が大量に枯れるということは、里山としての公益的機能、すなわち国土の保全、水源の涵養、自然環境の保全機能が完全に失われるということにほかなりません。さらに、ナラ枯れで心配されることは、獣害です。拡大造林以来、広葉樹が減少しているとい

われているなかで、追いつけ追いつけのナラ枯れは、木の実を餌とする野生動物にとっては大きなダメージです。ブナ科の木の実は、総称のドングリは、私たちにとってもなじみ深いですが、野生動物たちにとっては命をつなぐ大事な食料です。

ドングリの豊凶によって野生動物の個体数が大きく変動するともいわれているくらいで、ナラ枯れは野生動物にとって死活に関わる重大なことです。

私の知る限り、伊賀地方でのナラ枯れ発生は初めてだと思っています。この地方では、永年にわたって、人間が畑で作物を育てるように里山林を維持・管理してきた歴史があります。結果、ナラ枯れの発生が抑えられてきたのだと思います。

近年のナラ枯れ増加は、人間の生活様式の変化に伴い、里山林の伝統的な管理を、戦後の高度成長期以来、怠ってきたなかで起こっている現象で、地球温暖化など自然要因を指摘されることが多いですが、里山林の管理・保全を怠ってきた社会的要因を無視することは出来ません。対症療法は非常に難しく限界があります。若木（小径木）には、カシナガの感染がみら

野生鳥獣との関わり

れないという観点から、昔のように、森林資源を循環させるシステムをもう一度復活させ、萌芽更新を図りながら健康な森林にしたてていくことが、ナラ枯れ撲滅、里山林復活の近道ではないでしょうか。

も、多くの動物たちとの共存・共生を図り関わってきました。人と動物との関係を考えるとき、動物は大きく2つに分けることができます。自然界に生きたる野生動物と人間の完全な共生関係におかれた家畜です。

日本では農業と漁業が重要な一次産業で、日本人の多くがこれに従事してきました。その営みのなかで、野生動物との日々の関わりが、

「猪垣」などが現在にも残り、生活習慣や文化にまで影響を及ぼしてきました。人間の生活は今昔

積田神社にまつわる鹿の話

鹿は、現代は嫌われものだが、昔は神聖な動物で、鹿伝説は各地に残っている。710年、奈良の地に平城京ができ、そこで、都を守護する神に選ばれたのが武甕槌命（タケミカヅチノミコト）だった。タケミカヅチが住んでいたのは、奈良からは遠い茨城の鹿島神宮だった。そのとき乗り物に選ばれたのが鹿島神宮の一頭の白鹿。タケミカヅチは白鹿の背に跨って奈良へ向かう旅に出た。鹿島から約百里の三重県名張市夏見にある積田神社で、鹿を休めたという言い伝えが残っている。実際にその場所へ行ってみると、神様の柿と書いた「神柿」がある。この木はもともとタケミカヅチが鞭の代わりに使っていた柿の木で、柿の枝を地面に突き刺したところ、その枝が神の力で大地に根づき巨木へと成長したという。

犬につながり、犬が人の狩猟を助けることでさらに強まっていきました。人と動物の共生で最も古いのは、犬の祖先であるオオカミとの共生で、約3万年前にはじまったと考えられています。これは、オオカミが人から食物をもらい、人の住居に近づく他の猛獣に対し吠えるという、お互い「一緒にいないと困る」という関係性で、

近代になり農民以外の一般民衆が、野生鳥獣に日常的に関心を持つようになったのは、江戸時代末期から始まりました。この関係は、その後

た飼鳥の流行が原因の一つに揚げられます。これは野鳥を捕らえ飼育し繁殖成績や鳴き声を競わす風習で、一般庶民の間にもはやさ

れ明治・大正・昭和初期まで続き飼鳥は伝統文化の一種にまでなっていました。昭和9（1934）年、中西

悟堂が日本野鳥の会を創立し、一般の関心が野鳥に向けられ野鳥ブームをもたらしたが、戦争のため風潮は廃れていきました。環境保護、生物多様性の重要性が

説明された今、最も観察しやすい野鳥にスポットが当たり始めています。日本では自然保護活動が活発化したのは1960年頃からです。これまで自然動物との関わりは、なおざりにされていたが、ジョイ・アダムソンの「野生のエルザ」が発端で、京都大学の類人猿の研究が始まるなど野生鳥獣への関心が高まっ

カヤネズミは益獣だった！

イネを食い荒らすと考えられてきた日本最小のネズミ「カヤネズミ」が実際には田んぼの雑草を主に食べているとみられることが滋賀県立大学の研究でわかった。専門家は「安易に駆除せず見守って欲しい」と保護を呼びかけている。カヤネズミは本州から九州にかけて生息する体長6センチ、体重8グラムほどの日本最小のネズミ。今後、絶滅危惧種になる可能性がある。

滋賀県立大学環境科学部の非常勤講師、畠佐代子さんたちのグループは29カ所の田んぼでフンを採取し調査の結果、多くは、雑草やバッタなどの遺伝子だった。畠さんは、「カヤネズミ」はイネを食い荒らすのではなく、むしろイネの生育を妨げる雑草を主に食べていることがわかった。数が減っている種なので、駆除せず見守って欲しいと保護を呼びかけている。NHK 関西 NEWS WEBより抜粋。

ていきました。日本でも、ニホンサルの研究をかわきりに多くの野生動物が脚光を浴びるようになりました。一方鳥類も趣味の段階から本格的な研究の時代に入り始めました。日本人と野生鳥獣との関わりは宗教的に深いものがあり、殺生を戒める天武天皇の詔の意は現代人にも受け継がれています。今日、直面している野生鳥獣とのトラブルの原因の一つは「人間のための自然保護」で、野生動物の生息域を縮めてしまったことです。これには、「人間が生きていくため」と言う大義名分がついていますが、野生動物の立場から見ると大きな自然破壊に繋がっています。動物の視点から見た自然の価値観は、本来は動物である人間が生存するために不可欠のものは、不可欠のものでなければなりません。

急がれる 二次林の保全

イノシシやサルなどの野生動物による農作物被害を考える上で、農山村地域においては、栽培中の農作物以外にも、動物を集落に引きつける環境要因や生活要因は多数あります。そこで、動物をひきつける要因を取り除くことで、農作物被害を軽減することが期待できます。その要因解明のため、まず現状把握をする必要があります。

被害発生地域におけるサルの群れの食性を通年で調査した農林水産省によると、年間、採食時間の11%を農作物にあてていることが判りました。残りの89%については、43%が森林内における採食時間、46%は集落あるいは集落と森林の境界域で、農作物以外の食物を採食していました。

これは全国的な統計で、名張A・B群においては最近では森林を利用せず、農作物菜食と集落と森林の境界域（以下、二次林）での菜食が恒常的になっています。

二次林では、クズ、フジなどのほか、栽培放棄されたクリ、クワ、タケノコや、イネの落穂、放棄野菜など、営

農や生活に由来する餌が多数存在し、サルは山に帰らず、二次林での採食は通年にわたっていて、春野菜・夏野菜の季節には、この群が畑に出没して農作物に被害を引き起こすというのが現状です。

これは二次林の保全・管理が不適切だからと思います。

二次林での菜食を防ぐには、緩衝地帯の設置をはじめ、林縁部の放棄果木の伐採や草刈りなどの環境整備が必要です。野生動物は基本的に臆病で隠れ場所がなく見通しの良い農地への侵入をためらいます。緩衝地帯を設置することにより、追い払いなども容易にでき、野生動物は農地に侵入しにくくなります。

圃場では農作物の残渣除去や「ひこばえ」の発生防止に努めることも大事なことです。

家庭菜園においても捨て作りや生活残渣をなくし、集落内の餌場価値を下げる対策が必要です。

昭和30年頃の燃料革命、肥料革命などにより里山が荒廃し、弥生時代以来続けられてきた里山に依存した農業のあり方がまるで変わっ



イノシシ被害 サツマイモ全滅

てしまいました。ナラ枯れ、獣害の深刻化を考えると、里山の再生は必至です。里山を創造するには時間と手間がかかりますが、今なら回復の余地があり、今を逃しては里山の再生は難しくなると思います。

私ごとです。9月、はじめ頃、私の畑で収穫直前のサツマイモがイノシシに全てやられました。相違なく、十分な柵を物の見事に破壊しての侵入です。鉄製柵の一部腐食したところを狙っています。同じ日に、作物には被害が無かつたが、柵の破壊被害が近くの畑でもありました。今回はコストバランスを無視して電柵で畑の外周を囲みました。5万円の出費です。

イノシシは民家の近くでは、夜明けや夕方の薄暗い時間、夜間に行動しますが、危険がないと分かると日中でも活動するようになります。電柵は24時間作動させておくのが安全です。

電柵は軽い電気ショックで獣を驚かして、動物の侵入を防ぐ心理柵で、何度か柵線に触ると、ビリッとする電気ショックを嫌がり、次第に柵に近づかなくなります。電柵は、設置が簡単ですが、その分こまめな点検とメンテナンスが必要となります。イレギュラーな地形では地面との隙間が大きく空かないように、設置することがポイントです。

名張鳥獣害問題連絡会 臨時総会開催

平成28年8月28日
ふれあい会館203号室において、新入会者との顔合わせを兼ねた臨時総会を開催しました。出席者10名。

発足当時は、会員6名と小さな会でしたが、今回、7名が入会され会員総数13と大きく成長しました。

以下、会員を簡単に紹介します。

▼名張市安部田 伊藤 傳一
有機無農薬農業提唱者。

▼長野県飯田市松尾水城 元名張市 市議 小田 俊朗
▼名張市鴻之台 三重県 県議 北川 裕之
▼名張市矢川 元矢川区長 木戸 泰弘
渉外、広報担当。

▼名張市つつじが丘 名張市 市議 田北 利治
▼名張市夏見 名張西高校教諭 竹内 竜馬
赴任して5年。クラブ活動に獣害対策研究会を導入。

▼名張市赤目町 連絡会 会長 田村 修市
狩猟免許・調理師の資格を持ちジビエ料理に精通。



連絡会
臨時総会風景

▼名張市赤目町 畠山 ひさ子
モンキー・ドッグ第1期生オーナー。居住地の一ノ井と矢川でサルの出没防止の散歩を兼ねて活動中。

▼名張市つつじが丘 古川 高志
名張市でのサル動向調査の第一人者。

▼名張市布生 松本 美智子
モンキー・ドッグ第5期生オーナー。

▼名張市箕輪中村 森嶋 壽二
農業

▼名張市矢川 矢川区長 山田 泰次
伊賀タウン情報「ユ」ライター。

▼名張市矢川 山村 準
猿新聞編集者。

(敬称略 五十音順)

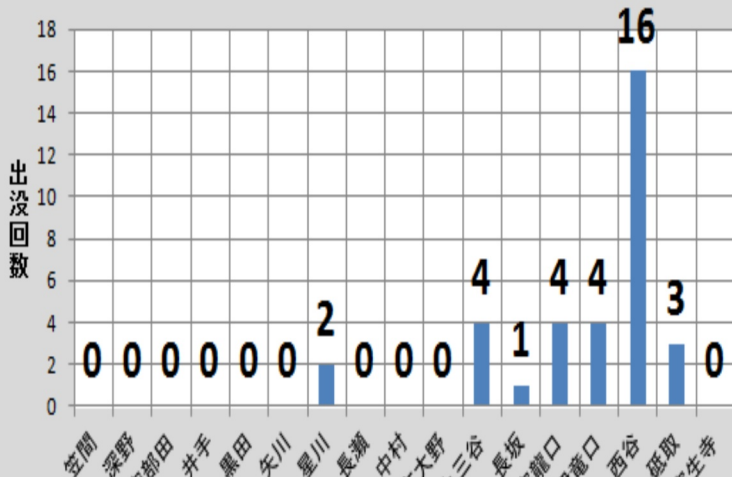
サルの出没状況 名張A・B群

指導員報告
9月の情報

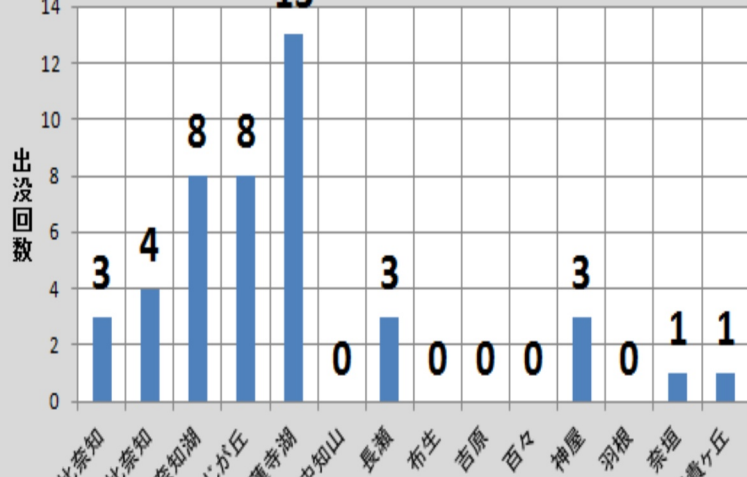
A群は、先月の後半から上比奈知地区・つつじが丘周辺を中心に活動して頻りに畑等に出没し被害を出しています。今月に入って青蓮寺湖・比奈知湖周辺のドングリ・クリ・柿などに集中。

B群は、先月後半から、赤目町の柏原・長坂でドングリを採食。今月に入ってほとんど室生に滞在し2、3日単位で西谷・蕨・滝谷の山の中を移動している。国道165号線の南側を中心に活動しているように思います。あまり畑や人家には出没していません。

名張B群移動グラフ



名張A群移動グラフ



編集・発行者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
発行部数
錦生地区：100部
赤目地区：200部
ひなち・富貴ヶ丘：200部
つつじが丘：430部
市民センター：120部
名張市議会：20部
名張市役所：20部